

アートフィールド探訪ガイド
ギャラリー

Gallery

Published since 1985, Gallery Monthly has put energy into introducing to our readers everything from domestic new artist/personal exhibitions to art master's large-scale shows. Of course, our editorial viewpoint always includes foreign art trends as well.

01

Vol.249
January
2006
840yen

特集

今年のアートシーンはどうなる？

画廊が期待するアーティスト2006

PART I

WORLD ARTIST

Park, Seo-Bo

朴栖甫

アーティスト訪問

会田 誠

作家の今

宮崎 進

1月の全国美術展「美術館/画廊」スケジュール&マップ

絵は修身の道具である
だから私は立派な絵を描くと言うことは考えていません

朴栖甫

WORLD
ARTIST

第4回 Park, Seo-Bo

北京、上海、台湾そして韓国のSIPA2006、昨年、アジアで行われたアートフェアの会場に、必ず、朴栖甫（Park Seo-Bo バク・ソボ）は元氣な姿を現わしていた。韓国現代アートの先駆者としてヨーロッパ、アメリカ、日本など国際的な発表を続けている1931年生まれのこのアーティストは、年齢を感じさせない力強い足取りで、現在も歩み続けている。今回はソウルの朴栖甫のアトリエを訪ねた。そこでは取材中も、オーストラリアのキャンベラで今年行われる韓国現代美術のシンポジウム（2007年には展覧会）に関する問合せや、来年のセントティエンヌ近代美術館（フランス）での個展準備と、それを前にしたフランスの雑誌のインタビューの申込などの電話がかかり、多忙な作家生活を目の当たりにした。

行為によって紙と一体化する

———このアートフェアでも、よくお会いしますが、失礼ながら年齢を改めて考えると驚くようなエネルギーですね。

28日（2006年11月）からのケルンのアートフェアにも私の作品を出品していますが、そこには顔をだしませんでした。10月7日は北京のSOCCAアートセンターで個展がありました。北京は近いですから行ってきましたよ。しかし歳をとっている人間としては嬉しいですね、いろいろなところから展覧会の要請がくるのは。国際的な作家というの70歳を超えるとだいたい仕事は終わっているものですが、実は、私はこれからなんです。いつも、これから、これからと言っていますが、死ぬ時になっても確かにそう言うでしょう私なら。そう言えるように

一生懸命やっていますから。

———作品は、韓国紙を使った非常に時間のかかるプロセスで制作なさっていますが、どんなに忙しくても、それはやはり変わらないですね。

まず紙を1ヶ月以上水の中に入れておきます。それが終わると紙を3枚重ねて、太い鉛筆の芯で横切るように、無心になって一日中線を引きます。その3枚の紙の中間に空気が入っていることがたまにあるんです。それでも14、5時間やりますと空気が追い出されるんですね。

———表現したいことがたくさんあって、気持ち急ぐというようなことはないんですか。

なぜあなたは絵を描きますか、と、聞かれれば、私は「絵は修身の道具である。ここまでは自分が無心になるよう、修身のための行為である。だから私は立派な絵を描こう」と答えますね。

私はお坊さんが一日中南無阿弥陀仏と唱える代わりに、手の力によってこの行為を続けます。それを重ねているうちに、自分が空になって、純粹になっています。ですから作品はその副産物として、でき上がったものなんです。西洋人ならこの線が目的だと言うでしょうけど、わたしは関係ない。副産物なんです。それが終わりますと、そ

Park Seo-Bo (朴栖甫)

- 1931年 韓国、慶尚北道醴泉生まれ
- 1954年 弘益大学美術学部絵画科卒業。
- 1991年 'PARK,SEO-BO' Painting (ソウル国立現代美術館)
- 1996年 バーゼルアートフェア
- 1997年 エース画廊 (ロサンゼルス)
- 2000年 東京画廊 (個展 1978~) MANIF6 (ソウルアートセンター)
- 2001年 韓国の現代美術1970-90 現代画廊 (ソウル)
- 2002年 メルボルンアートフェア 現代画廊 (個展 1981~) ソウル The Unfinished Century: Legacies 20th Century Art (東京国立近代美術館)

のへんから絵描きになるんです。この行為は目的性がないから、無目的だから、ただ行為の手味をかさねていく。続けて重ねていく、時間と共に、そういう感じなんです。ですから、私のキャンパスには、表現者の立場じゃなくて、ひとつの道具として入るんです。私自身もひとつの道具なんです。ですから、私がやってた仕事のうえに、Aという助手が手をかけても関係ない、その翌日Cという助手が続けてやっても、そしてその上に私がやっても関係ない。はじめは助手たちが何かの表現だと思ってるんです。そうすると私が消すんです。破壊するんです。お前はただ道具として入りなさいと。

——紙そのものに対して、特別な気持ちがあるようですね。

1983年の2月だったかな、京都で国際紙会議があって、ラウシェンバーク、デビッドホッ

クニー、井田照一と私がいて、その時、私は特に2人のアメリカ人に対して、討論していたんです。例えばこの紙の上に円を描きますと、円と出会いをしていくわけで、紙は見えないわけですね。彫刻だって大理石を見ているんじゃない彫刻という形が見えている。これが今までの一方的な芸術のやり方じゃないですかと。ですから、私は紙の身が立つように協力者の立場でやっていかなければならないといったんです。これが新しい文化の始まりであると言ったんですよ。彼らは、あるイメージをのせますね、それは紙じゃなくても、キャンパスの上でもコンクリートの上でも、鉄板でもガラスでも関係ないんです。それなのになぜ紙を選びますかということなんです。基本的に、なんでも同じものをのせるということは、あなた達にはそのモノに対する尊敬が無いといってや



りました。その後、何も言わずにソウルに戻ったんですが、そしたらラウシェンバークは感激

して、ポスターにサインして私に渡してくれと韓国の紙の専門家に預けておいてくれたんです

ね。いずれにしても、私の作品はミクストメディアですが、Withコリアン・ペーパーなんです。「オン」じゃない。紙の上に行為をのせるんじゃないくて、行為によって紙と一体化するんで

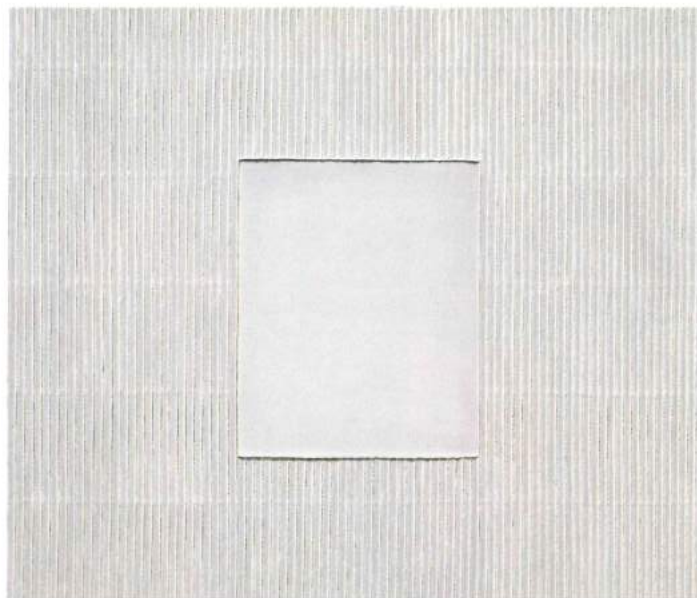
す。ですからオンじゃなくて、ミキなんです。

表現の吐露は暴力

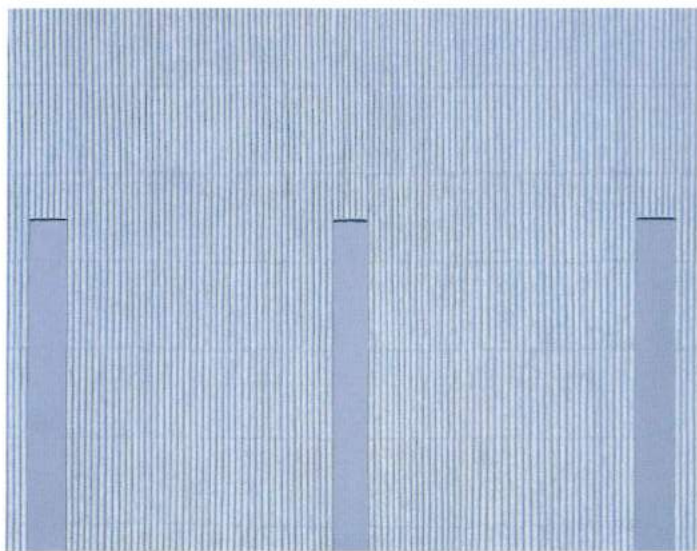
——無心になって手の行為を積み

重ね、紙と一体になるというのは確かに修身ということだと分かれますが、自己の表現というものはどうなんですか。

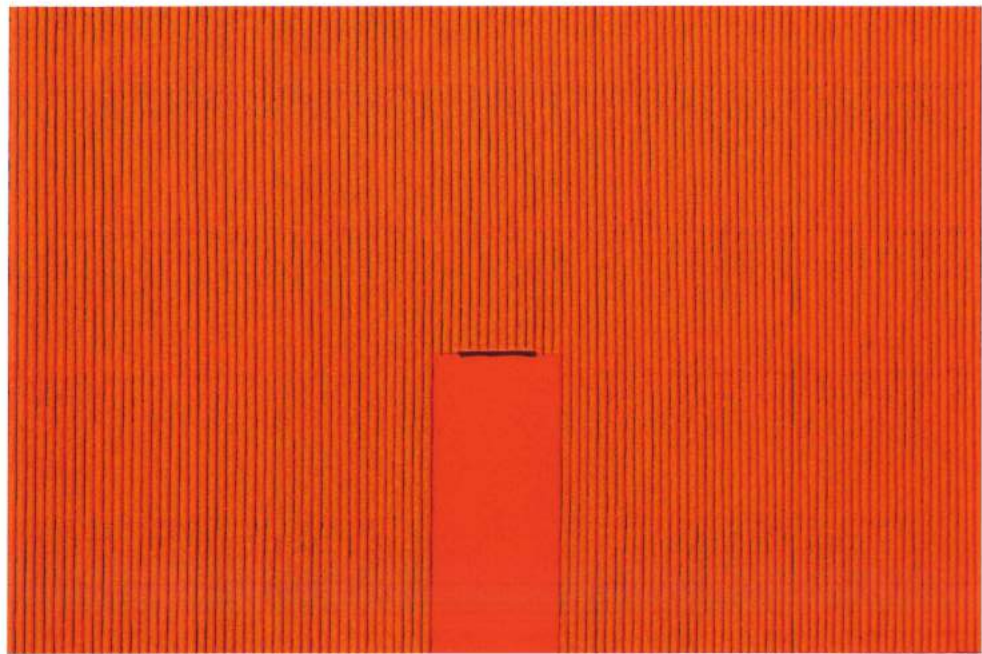
りますね。しかし、こういったものは何かを表現するための目的の元にあるわけなんです。しかし私はそんなものはいらない。無目的性である。何も表現していない。本当の人間の手の味の



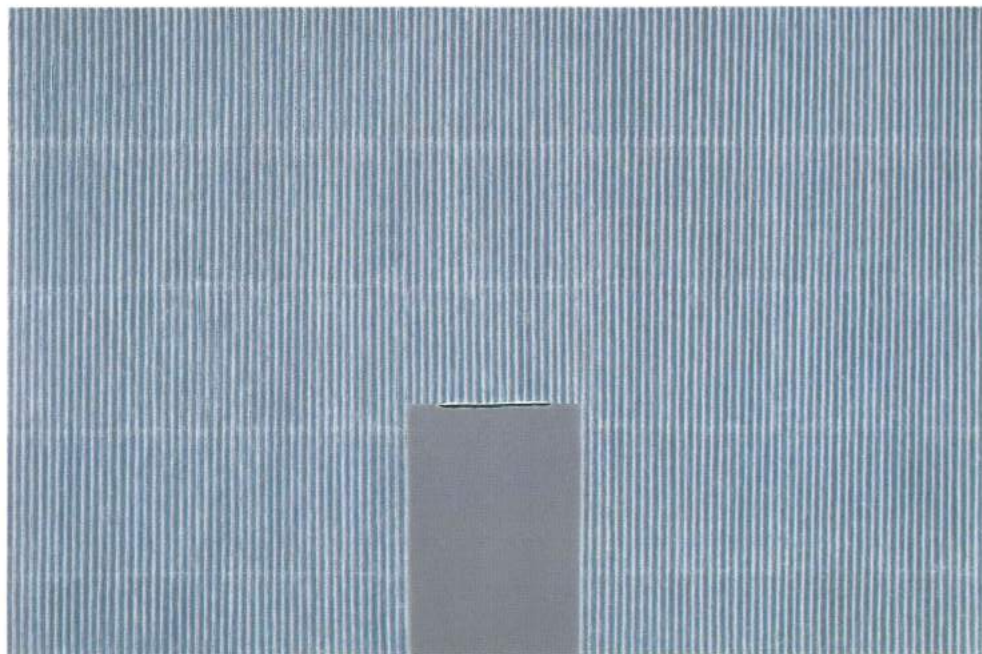
ECRITURE (描法) NO. 021009・2002・Mixed Media with Korean Paper on Canvas. 162cmX195cm



ECRITURE (描法) NO. 031219・2003・Mixed Media with Korean Paper on Canvas. 182cmX228cm



ECRITURE (描法) NO. 050502 · 2005 · Mixed Media with Korean Paper on Canvas. 130cmX195cm



ECRITURE (描法) NO. 050428 · 2005 · Mixed Media with Korean Paper on Canvas. 130cmX195cm

いない。本当の人間の手の味の重ねなんです。過去の絵画、20世紀の絵画は、絵描きが表現者の立場で偉そうに、自分の思いを吐露する、20世紀はそういうことだったんです。作家が一方的にワーツとね。これは暴力ですよ、受ける側からすると。その作家から暴力を与えられたということになったちゃうんです。そういう20世紀、アナログ時代はもう終わりました。21世紀は確かに違う、完全に違うんですね。今私の周りの若者は、もう30歳になりますと定年後を心配しています。アナログ時代は60歳定年で、一生かけて勤めましたが、今はそんなことはない。急テンポに変わっているんです。もはや30歳、子どもが生まれてお父さんになったばかりだという時代に、もう定年後を考えなくてはいけません。アナログ時代と違って、情報の変化が非常に急テンポなんです。情報の変化

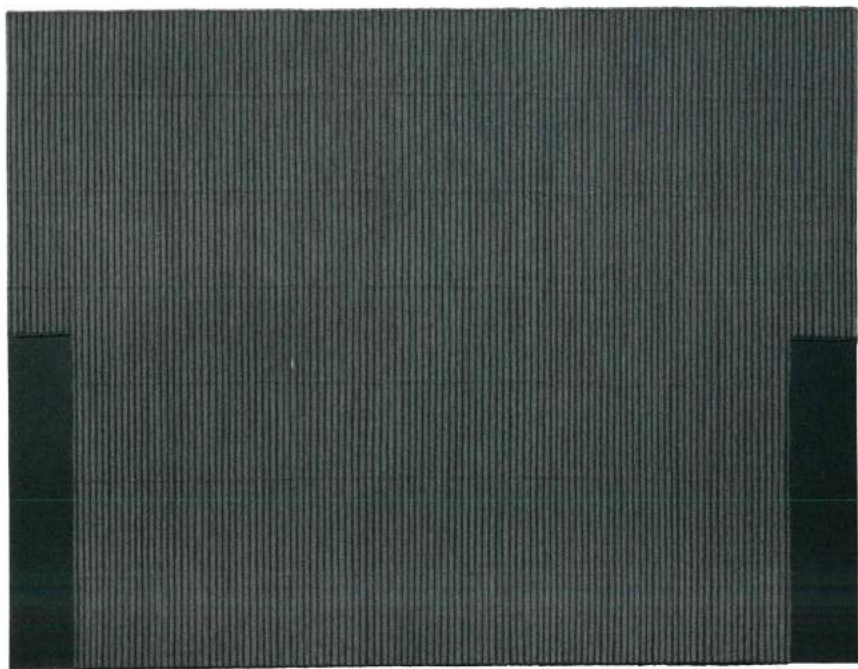
から追い出された人間はもうおしまい。こういう時代になると、人間は慌てるわけなんです。会社で自分の後輩が、明日は上司になっているとか、そういうストレスはいっぱい溜まるわけなんです。こういう時代に芸術家といわれる若者は、すぐ、デジタルのテクニクと芸術を結ぼうとする。それはアホでもみんなすぐ考えるんです。そこで評論家という、そんなに基本的に勉強もしない連中たちは、自分を早く人の前に見せるために、そういう若者を取り込む。使われた若者は自分は天才だと感じるけど、デジタルの時代の変化は速くて、1年か2年で、次の新しい天才がでる。だから一度使われて捨てられる。そして彼をつかったキュレーターも同じです。そこで1回用の天才たちやキュレーターは平面が終わったと言いますが、私は本当に終わりましたかと、彼らに聞きた

いですね。人間が21世紀になって、鳥のようにあの枝を飛びながら暮らすようになりますと、平面は終わります。必ず終わります。しかし、屋根を持って生きて暮らす限り、壁はありますし、平面は終わりません。というのが私の考えです。しかし、暴力性を持った一方的な表現のアナログ時代の平面は終わらなくちゃならない。ストレスの多い時代に生きる彼らが、家に夕方もどつて、家でまた暴力的な平面に接したいですか。ですから、そういうアナログ時代の平面は、終わって欲しい、終わらなくちゃならない。インクで字を書く時、吸い取り紙を使いますね。平面がその吸い取り紙のようにならなくてはいけないというのが私の考えです。コンプレックスとかストレスとか、すべてを吸い込んでくれる、見ているうちに非常に安心できるもの。それは何かを表現しようと

いうものではない。人間が21世紀にならない。ですから、私は時間を重ねた手の行為、手の痕跡、それが吸い取り紙になるというんですよ。今までそういう表現をしていなかったんです。

——先生は昔、鉛筆でストロークのある絵を描いていましたね。それは今とコンセプトが違うと思いますが、いつごろから自分を無にするという作品を描き始めたんですか。

今になってちょうどわが国のコレクターとか、一般がね、あの鉛筆の仕事がいいというんです。あそこにはなんといっても個人の表現がでているんですよ、人間くさい面が。私はそれが嫌だ。もっと客観化しないと、私は仕事として長生きできないんです。あの時も線を引いていました。あれは線が目的じゃなくて、ただ行為、反復する行為だったのですが、あそこにはその日の気持ちによってとか、何と



ECRITURE (描法) NO・991123・1999・Mixed Media with Korean Paper on Canvas. 200cmX260cm

かがありますね。個人的な主体から描いたわけなんです。今は、完全にそれを追い出すわけです、もっと冷たく。しかし、私の作品を見て、だれも冷たいとは言わない。ということは手の味を重ねているから、人間を吸い取るんです。

——膨大な量のエスキースを以前見せていただいたことがありますが、それは重要な位置を占めているんですか。

エスキースは自分を変化させるきっかけみたいなものですが、徹底的にエスキースしないと駄目なんです。エスキースをしない作家は空回りするんです。イメージの表現をしていない場合はもっとそうなんです。そういう作品は続けてやっているうちに、実は自分が自分を真似するんです。反復するという名で自分が騙されるわけ。それを早く自覚しないといけない。それは現代美術全般がそうなんじゃ

ないでしょうか。ある意味でリズムも同じ。ただ表現しうと言うテーマが違うだけなんです。他はみんな自分の反復という意味で自分の真似なんです。これはエスキースなんですけど、今、このエスキースであれを制作しています。アクリルや絵の具なら、作品を直すことができますが、私の作品は直すことができない。1センチまで、徹底的にやらないと。今制作している作品は2、3年前のエスキースなんです。そんなエスキースがこんなにある。それをちょいちょい出してみて、みんな直していきます。いろいろ考えて作品にしていくわけですが、簡単にしないで。それが制作し始めますと、はじめの発想で決定した考えとまた変わっているんです。自分で変えようと意識はしませんが、自然にそうなっていくんですね。